

Living the Lotus 6

2024
VOL. 225

Buddhism in Everyday Life



2024年北カリフォルニア桜祭り
サンフランシスコに北米会員が集い、笑顔で行進

Living the Lotus Vol. 225 (June 2024)

【発行】立正佼成会 国際伝道部

〒166-8537

東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F

Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224

E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp

編集責任者: 赤川 恵一

編集チーフ: 三川 紗知

校閲者: 小坂 和正、菊池 克之

編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生き、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教) というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

心やすらかに、
おだやかに生きる

庭野日鑑
立正佼成会会長



「こんなふう生きられたら。」

青葉が雨に洗われて、ひときわ目に映える季節が、もうすぐやってきます。ただ雨は、湿度と気温の上昇とともに心までじっとりと濡らして憂鬱にさせられたりもしますが、私たちはせめて心だけでも晴れやかでありたいものです。

先日、すてきな詩篇と出会いました。詩人の谷川俊太郎さんが、英訳の「法句経」のなかから共感を覚えた言葉を日本語で自由に表現したというものです。その一つをご紹介します。

おだやかに

追い求めると／楽しみには哀しみしか残らない／甘えると／苦しみはいつまでもうづく

失うもののないころには／喜びが流れこんでくる

怒りが閉ざす／ころを閉ざす／うぬぼれがしぼる／ころをしぼる

おだやかにあれ ころよ／のびやかに しなやかに はれやかに

(『すこやかに おだやかに しなやかに』佼成出版社)

本の帯には「こんなふう生きられたら。」とのみ書かれているのですが、まさにそのとおりだと感じ入ったのです。

おだやかに、のびやかに、しなやかに、そしてすこやかに。このように生きられたら、ほんとうに心はいつもすっきりと晴れやかで、安穩——とらわれも憂いも煩いもないやすらかな日々を送ることができるに違いありません。

釈尊は、私たちを安穩の境地に運ぶのは「精進」と教えてくださっています。したがって、精進を重ねるなかに、そうしたやすらかな日々があると受けとめることができますが、では、その精進とは具体的に何を指すのでしょうか。

向上を願う気持ちがあれば

仏教は「無上の教え」といわれ、この上なくすばらしい教えとも受けとれます。ただ、私たちはそれを有り難く拝するだけではなくて、どれほど学んでも上限のない教えと受けとめて心を耕しつつ、学んだことを日々実践する。それが、私たちが安穩に導く精進だと思うのです。

宗教は、身をもってする行為に具体的にあらわれてこそ意味がありますから、やさしさや思いやり、明るくあたたかな対応など、学んだ教えを日常の所作一つ一つに生かすことが精進となり、そうした一瞬一瞬の積み重ねが心やすらかな日々をもたらすのです。

ただ、「学んだ教えを」といっても、何を心にとめて日々実践につなげればいいのかに迷う人がいるかもしれません。私は、理想とする人や、「このように生きたい」「こうありたい」との「志」によって、人それぞれの精進があるのではないかと思っています。

たとえば日々、自分の役割を果たそうと健康維持に努めることも布施（身施）に通じる精進であり、人に迷惑をかけずに生きていける人はいませんが、なるべく迷惑をかけないようにと慎み深くあることも精進の一つです。職業上の仕事はもちろん、日常の家事——炊事や洗濯、子育て——にもつねに感謝と喜びをもってとりくむこともりっぱな精進で、つまり自身が向上を願いつつ、その志にしたがって日々を送るところにそれぞれの「精進」があり、それが悦びとやすらぎをもたらすと思うのです。

しかしながら、ときには心が晴れない日もあるでしょう。そういうとき、たとえばこの時季ならではの東井義雄さんの言葉「雨がふっても／ブツブツいうまい／雨の日には／雨の日の生き方がある」にならって、いやだと思ふときにこそ新しい生き方を発見してみるという精進はどうでしょうか。その日一日が、きとおだやかな好日となるはずで

（『佼成』2024年6月号）



Spiritual Journey

サンガと共にご法を分かち合い、この身を使いたい

サンアントニオ支部 副会長
ケヴィン・ロシェイ

この体験説法は、2024年3月15日に大聖堂で行なわれた「釈迦牟尼仏ご命日(布薩の日)」式典の中で発表されたものです。

皆さま、お願いいたします。

私の名前は、ケヴィン・ロシェイです。現在、アメリカ南部のテキサス州にあるサンアントニオ支部の副会長のお役をさせていただいています。今日、皆さんの前で、私が立正佼成会の教えと実践によって救われた体験についてお説法させていただけることをとても光榮に思っています。

私は1957年、FBI捜査官の父とカトリック女子修道会の料理人兼お手伝いとして働いていた母との間に、7人兄弟の5番目の子どもとしてニューヨークで生まれ育ちました。両親は、アイルランド移民の労働者階級の子どものとして育ち、自分たちが育てられた時と同じように、厳しくも思いやりをもって私たち兄弟を育ててくれました。

子どもの頃の私は落ち着きがなく、カッとなりやすい性格でしたので、学校や地域では問題児として知られていました。当時の学校では、問題行動を起こす子どもへのしっかりした対応策はなく、私は周りの大人から体罰を受けるようになりました。その結果、私は自虐的な行動をするようになり、少年の頃から飲酒や薬物の乱用を始め、街の危険な地区に出入りすることが多くなりました。9歳以降、学校生活の



大聖堂で説法をするケビン副会長



幼少期に家族に囲まれて(前列中央)

楽しい記憶は一つもなく、みじめな出来事や反抗の連続でした。やがて家族と一緒にいることを避けるようになり、ある時、サンアントニオに住んでいた姉と一緒に住まないかと誘ってくれたため、私は家を出て姉の家で暮らすことにしました。まだアルコールを断つにはほど遠い状態でしたが、なんとか当時の暗い環境や交友関係から距離を置くことができました。

大学を卒業して医療関係の分野で働き始めた頃、

Spiritual Journey

ある女性と出会い、結婚しました。妻の仕事の関係で、山口県岩国市に移り住んだ時期があり、私はその時初めてアルコールを断ち、心穏やかな生活を経験しました。しかし、アメリカに帰国後、再びアルコールと薬物に溺れていったために結婚生活は破綻し、離婚した私は1986年、どん底状態の中でテキサスに戻ったのです。

そして1989年に、現在の妻である素晴らしい女性、バーバラに出会ったことで私の世界は一変しました。妻は今日、私と一緒にこの大聖堂にまいりました。妻は愛情と優しさで私がアルコールと薬物をやめられるよう支えてくれました。そして自分自身を大切にするように励まし続けてくれました。妻のおかげで視界を覆い隠していた暗雲は次第に消え、私自身の尊い仏性に気づくことができたのです。以来35年間、私たちはテキサスの農場で馬やロバ、ラマ、犬たちと一緒に幸せな日々を送っています。

私がこの尊い教えと出遇ったのは2004年のことです。毎日車で通り過ぎていたサンアントニオの小さな建物の看板の文字が、ある日漢字から英語に変わったことに気がつきました。「立正佼成会:どなたでも歓迎します」と書かれた看板を見て、私はすぐに引き返し、車を道場の駐車場にとめました。その看板の変化を私は仏さまからのメッセージとして受け止め、サンアントニオ支部で初めて仲村直巳元



シアトル支部に仲村直巳元布教師を訪ねて

布教師さんにお会いしたのです。布教師さんは「あなたのことを待っていましたよ」と穏やかな口調で語りかけてくださり、不思議と自分の家に帰ったような気持ちになりました。その後、布教師さんは立正佼成会の信仰、釈尊と開祖さまの教えについてお話しくださり、私は生まれて初めて魂が揺り動かされるような思いがしました。

当時、サンアントニオ支部には日本語会員と、50～70人ほどの小さな英語会員のサンガがありました。布教師さんは毎週火曜日の夜、私たちの信仰的な成長を願って、法華經の勉強会を開いてくださいました。法華經を学ぶうちに私の心はあたたかくなり、人生観が変わっていくような気持ちになりました。

2008年、私は体調を崩し、病院で診察を受けると医師からがんの疑いがあると告げられました。不安と恐怖から、すぐに布教師さんに相談しました。すると、「家に帰って、ご宝前で法華經の十六番をあげなさい」と言われ、続いて「仏さまは、あなたのために別の計画をお持ちなのです」と、私にとって忘れることのできない言葉をかけてくださいました。そのお言葉に、身体の健康という枠を超えた何か深い意味があることを感じましたが、当時は理解できませんでした。結局、その時は幸いにもがんではありませんでしたが、のちに、そのお言葉が、私の人生にとって、かけがえのない意味を持つものになりました。

2009年に布教師さんが退任されることになりました。後任はおらず、英語サンガは不安に包まれました。数年の間に、退会や高齢による引退などで徐々に会員が減っていきました。私たちはサンガを率いてくれるリーダーを求めていましたが、願いは叶わず、私自身もその役を果たすことはできませんでした。自信がなく、怖かったのです。暗闇の中に放りだされたような気持ちでしたが、私は教えを実践し続けなければ、また以前のような人生に戻ってしまうと思い、サンガを去ることもできませんでした。数

Spiritual Journey

人の会員に声をかけ、地元のショッピングセンターに集まり、『法華三部経』と開祖さまの教えの勉強会を始めました。少人数の英語サンガが戻ってきましたが、どう進んでいいかわからないまま、孤独と不安の中にいました。当時、私を励ましてくれたのは、オクラホマ教会のクリス・ラドソー教会長さんでした。私がクリス教会長さんに電話をすると、必ず電話に出て話を聞いてくれました。「もしあなたが本当に教えを伝えていきたいのなら、必ず仏さまが道をつけてくれる。」その言葉で、私はなんとか精進を続けました。クリス教会長さんの智慧と励ましにいつも感謝しています。

その頃、一人の素晴らしい会員が入会しました。サンディという名前の女性です。私たちは共に教えを実践する仲間になり、英語会員がほんの一握りになった時期も活動を共にしました。しかし、残念なことに、彼女は2013年にがんで亡くなりました。彼女は長年がんを患っていましたが、決してつらい表情は見せずにいつも周りの人を気遣ってくれました。私とサンディは、道場はもとより、毎日散歩をしながらも夢中にご法の話をするほどの、まさに法の友でした。

彼女が亡くなる2日ほど前、私が病床の彼女の枕元に行くと、彼女は、手にしていた自分のお数珠を私にあげたいと言うのです。そして、1通の封筒を私に手渡し、「あとで読んでね」と言いました。彼女が

亡くなった後、その封筒を開けると、中にはこれまで私とご法の話をした内容がびっしりと書き込まれた便箋が入っていました。彼女は帰宅後、私とご法の話をしたあと必ずその日のことを書き留めていたのです。彼女のその尊い実践は、たとえ苦しみの中にあっても、人生の一瞬一瞬がどんなに尊いものであるかを教えてくれました。教えを学ぶことで人生が喜びに満ち、実践することで人生が輝くことを知りました。

さらに不思議なめぐり合わせなのですが、サンディが亡くなってまもなく私のがんの診断を受けたのです。血液のがんでした。その後、私は死の恐怖や不安に襲われながら化学療法による治療を数か月間続けました。がんの治療は、つらく苦しいものでしたが、その間、私は一日も欠かさず道場に通いました。命ある限り、サンディのように一瞬一瞬を大切にしていって、サンガの皆さんに尊い教えを伝えていきたいと思ったからです。

まもなくして、小高利之元ロサンゼルス教会長さんから教師資格拝受のお話をいただいた時、私は驚きと同時に喜びでいっぱいになりました。当時、支部には手本とする英語会員のリーダーはいませんでした。でもこの時は以前の私とは大きく違いました。仏さま、開祖さまの教えをサンアントニオに広め、サンガのために奉仕をさせていただきたいと心が定まったのです。そして、「仏さまは、あなたのために別の計画をお持ちなのです」という仲村元布教師さんの言葉の意味をようやく理解することができたのです。

それから数年間、私たちサンガは新たな素晴らしいリーダーたちを育て、また、様々な背景をもつたくさんの方の熱心な新入会員を迎えました。

2020年、私はサンアントニオ支部の副教会長の大役を拝命し、会員の皆さんと毎日楽しく活動しています。法座や研修会で支部の会員さんの話に耳を傾け、彼らの体験から湧き出る智慧や、ご法を生活の中で実践して救われていく姿から多くのことを



サンアントニオ支部の会員たちと「三草二木の譬え」の劇を演じた後に(最後列中央)

Spiritual Journey

学びました。会員さんたちにとって不幸な体験は人生の傷跡ではなく、強い心を持って生きてきたことを示す“しるし”であり、それは光り輝き、癒しと感動に満ちたものなのです。

現在、支部の会員は400人近くに増えました。そのサンガの皆さんの菩薩としての働きは、道を照らす光となって、私を一人の布教者として、そして人間として成長させてくれています。

会長先生は『佼成』2017年10月号のご法話で、「苦しみや悩みは貴重な経験として『ありがたいもの』だということも、いろいろな体験をして初めて『ああ、ほんとうにそうだな』『苦があればこそその楽なのだ』と

受けとれるようになると思うのです。」と、ご指導くださっています。

世界中の立正佼成会のサンガの皆さん、そして、愛するサンアントニオ支部の皆さんにお伝えします。「私の心のポケットは苦しかった出来事でいっぱいでしたが、教えのおかげさまで、私の心は喜びであふれています。」苦しいことの多い世の中ですが、心にエネルギーが湧き上がる泉になれるよう、サンアントニオ支部の一会員として、そしてリーダーとして、本日、仏さまの御前で、喜びと感謝の心で今後もご法に精進させていただくことをお誓いいたします。

皆さま、ありがとうございました。



大聖堂での説法後に、応援に駆け付けた友人や本部職員たちと一緒に

まんが立正佼成会入門

会員になったら

ご先祖さまを大切にする

ご宝前の総戒名には、すべてのご先祖さまへの供養と会員としてのあり方、修行の目的や方法があらわされています。

私たち一人ひとりには両親だけでなく、両親の両親、そのまた両親……というように、たいへんな数のご先祖さまがいます。その人たちが

すべてのおかげさまで、いまの自分がいるのです。私たちもいつかはお先祖さまと呼ばれるようになります。いのちはこうしてつながっていきます。私たちがいま、生きているのはとても不思議なことなのです。





『まんが立正佼成会入門』は、佼成ショップにて好評発売中です。
<https://www.koseishop.com/>

教えをお伝えする（導き）

仏さまの教えが広まり、実践する人が増えれば、幸せな人が多くなり、社会も明るくなります。そのために教えを伝え、教えの通りに生活してもらえるように勧めることが「導き」です。

また、教えについて人に話すことで、自分自身が十分に理解していないところがわかります

し、仏さまの願いやはたらきに気づくこともできるのです。

「導き」は、人びとを正しい道に導き、明るい世の中をつくっていく尊い行ないであるとともに、自分自身が教えを理解し、成長するための大切な修行でもあるのです。





お役のある人

仏さまからいただいたお役

立正佼成会開祖 庭野日敬



そのような「利他」の行ないは、他を利するだけにとどまるものではありません。それは、必ず「自利」すなわち自分の利益ともなるのです。というのは、そうした利他行を積み重ねていくなかで、自分が一歩ずつ人格的に向上していくからです。

教会での「お役」もそのとおりで、たとえそれが簡単な「お役」であっても、それをしっ

かり果たすとき、いいしれない喜びが湧いてきます。それというのも、「お役」を果たしていくなかで、仏さまの「お手配」ということをひしひしと感じとれるからです。それだけでなく、その「お役」は、人間としての最高の理想である仏の境地に近づく一歩なのです。ですから、私は声を大にしていいたいのです。「役とは益なり。また、役とは成仏なり」と。

ただ、現実の問題として、「お役」を厄介だと思ふ人や、「そんな大役が、私につとまるかしら」と尻ごみする人もいるでしょう。しかし、そのところで、「これは仏さまからいただいたお役なのだ」と喜んで受けとめるところに、信仰の功德があるのです。仏さまを信じて、「どんなお役でも、万難を排して、果たさせてもらいます」という気持ちになる人が、ぐんぐん救われていくのです。

道元禅師が、こうっています。

「今人云く、行じ易きの行を行ずべしと。此の言尤も非なり。太だ仏道に合わず」と。行じやすい行をしたほうがいいというのは、仏道に適わない考えである、ということです。

「自分にはつとまりそうもない」と思われるような「お役」を精いっぱいつとめる。それが「仏道に適う」のであって、真の功德をいただけるのです。どうか、この道元禅師の言葉をじっくり味わってほしいと思います。

庭野日敬平成法話集 1 『菩提の萌を発さしむ』P.52-53

地域へのご恩返し

国際伝道部長
赤川 恵一

みなさん、お元気ですか？爽やかな初夏を迎え、風に揺れる木々を眺めながら、自然界に息づく命の躍動を感じております。

会長先生は1月のご法話の中で、自身のご著書である『心田を耕す』に触れられ、安穩の境地を得るためには「釈尊が伝えたいと願われたことをシンプルに受けとり、日々の生活の中で無理なく実践すること」が肝心と教えてくださいました。そして、今月のご法話では、具体的は何を実践すれば良いのか迷う私たちに、「このように生きたい」との「志」を持つことが、人それぞれの精進につながるとアドバイスしてくださいました。

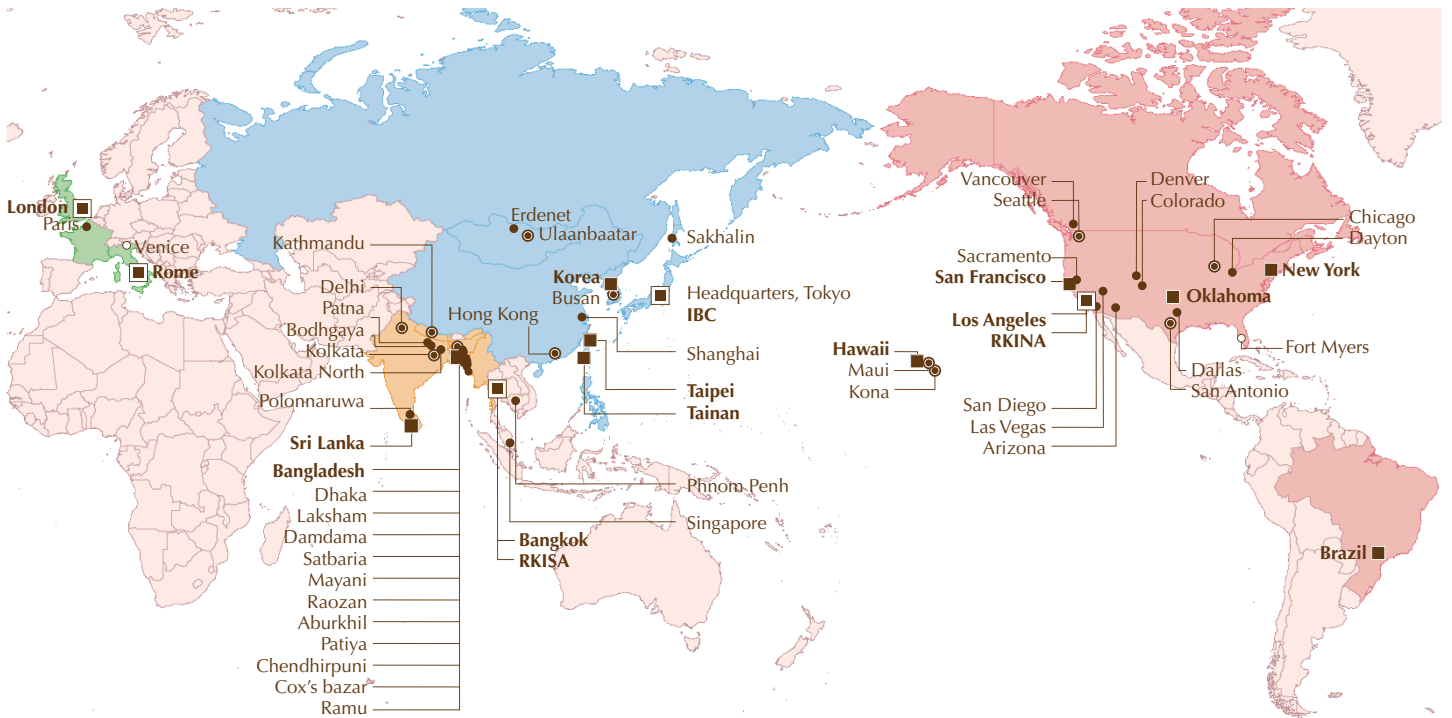
今春、私は町内会の依頼を受け、自宅の近隣地区の「組長」を務めることになりました。組長には町内会費の集金をはじめ、定例会議や各種行事の開催、地域功労者の顕彰など、地域に関わる大切な役割があります。私たち家族がこの地域に住み始めて20年が経ちました。「組長」のお役をとおして、地域の人々が新参の私たちを受け入れ、信頼してくださっていることへの感謝、そしてこれまで無事に住み続けてこられたことへの感謝を形にする機会を頂けたものと思っています。様々な苦労もあろうかと思いますが、地域に恩返しをしたいという「志」を持つことで、今まで見えなかった世界が広がってきていることを感じます。いよいよ、面白くなってきたぞ。



2024年4月8日、一乗宝塔の前で降誕会団参の参加者と
(最前列左から三人目が赤川部長)



🌸 *A Global Buddhist Movement* 🌸



Information about
local Dharma centers

